

特集 自治が動き出す

インタビュー●

新しいまちの自治が始まる

保原和成・宮城県石巻市復興事業部区画整理第1課

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県石巻市。二〇一五年一月に、被災地では最大規模となる集団移転地の「まちびらき」が開催された。復興にむけ、新たな自治がはじまろうとしている。

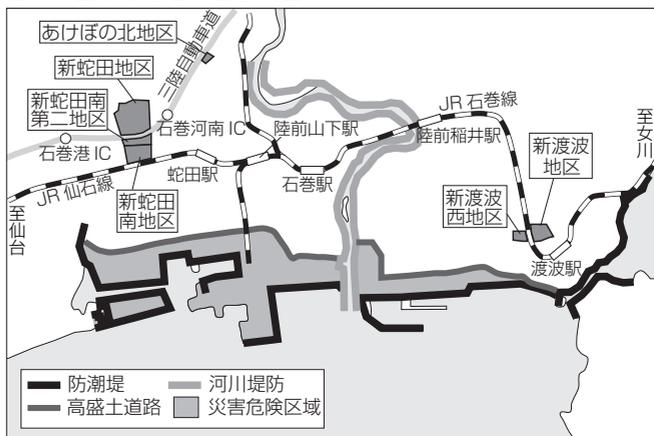
——二〇一六年は東日本大震災から五年の節目になる年です。それを前にして、この震災で最大の被害を受けた石巻市で、一月三日に「まちびらき」のイベントが開かれました。この「新蛇田地区」は、被災地では最大規模の集団移転地になるということなんですよ。

保原 そうですね。市内の新市街地事業六地区合同の「まちびらき」を、面積が四六・五ha、計画戸数が一二六五戸という

最大規模の移転地になる「新蛇田地区」で行いました。

本来、区画整理事業で式典をする場合、換地処分という事業が終わるタイミングなどで式典をしたりするんですが、地区ごとに供給時期や事業が終了するタイミングが違い、二〇一四年から土地の引き渡しが始まって、終わるのは二〇一九年くらいで、事業が終わるまで五年もかかる地区もあります。その間に住

図●集団移転地と災害危険区域の概要



み始める方がどんどん増えていきますので、事業が終わったところに「まちびらき」といっても、ちょっとタイミングが違うかなというところで、今の石巻を全国の皆さんに発信するためにも開催することに

なりました。

「まちづくり」までの道のり

——ここまでくるのに、大変なご苦労もあつたと思うんですが、そのあたりの経緯などをお聞かせいただけますか。

保原 石巻市では、今年の九月一〇日現在で、震災で亡くなった方が三二七八人、行方不明の方が四三二人、建物の全壊が約二万棟、半壊や一部損壊も合わせますと合計で五万六七〇〇棟が被害を受けてました。市街地の約七割が浸水をし、主に二m以上の浸水があつた沿岸部を中心に、二〇一二年一二月に災害危険区域を指定しまして、この区域にお住まいであつた約三五〇〇世帯のみなさんが内陸部への移転の対象となりました。

私はこの四月から区画整理事業の担当も兼務することになったのですが、もともとはこの集団移転の窓口をずっと担当していたんです。ですので、移転の対象となつた方と一口に言っても、被災の状

況で言えば、すべてを失つた方から、家は残つたけれど移転をお願いしなければならぬ方もいらつしやいますし、再建についても、新市街地への移転をお申込みいただいた方以外にも、ご自分で土地を求めて移転された方や、親族のところに同居することになった方もいらつしやいますし、みなさん本当にさまざまですので、その把握というのが大変でしたね。

——具体的にはどのように把握されていったんですか？

保原 二〇一一年いっぱいまで避難所がありましたので、とてもそういう状況ではなくて、仮設住宅の建設も追いついてきた二〇一二年になってから、住まいに関する今後の意向調査というアンケートを六月と十一月の二回にわたつて調査をしまして、その後は、個別に意向をうかがつていくという形で進めていきました。先ほど三五〇〇世帯と言いましたが、これは市街地だけの数字で、半島部と呼ん

自分の土地なんだから、また津波が来てもいいから家を建てたいという方もたくさんおられました。この説得が本当に大変でした。

——簡単に決断できるような話じゃないですよな。

保原 そうなんです。移転して家を建てたいと思つた人でも、年齢的なものや、世帯の構成を考えると、本当にこれから建



ほろあ・かずなり 一九七五年石巻市生まれ。宮城県石巻工業高校卒業後、九四年に石巻市に入職。荻浜支所・社会教育課・農林課・国保年金課などを経て現職。窓口業務などを主に担当。自治労石巻市職労で九八年より執行委員となり、現在、書記次長。

てもいいのかどうかといったことをみなさん悩まれます。その時、その方にとって一番いい再建方法は何なのかを考え、選択肢をできるだけ多くお示して相談対応していました。

——仕事を休む暇もなかつたんじゃないですか？

保原 そうですね。その当時は夕方五時、六時まで窓口で相談対応をして、そこから仕事の調整に入るので、委託コンサルタント会社との打合せも夜の九時、一〇時からがあたり前でしたし、また家を建てる選択をされる方は勤務世帯が多いですから、どうしても週末に時間を取る必要がありますから、今ではもう笑い話として話せますけど、当時は本当に大変でしたね。

新市街地のまちづくり

——新市街地の整備の方はどのように進められたのでしょうか。

保原 内陸の新市街地の用地は、ほとん

でいる沿岸地区（合併前旧町など）も含めると、移転の対象になる方は七〇〇〇世帯くらいなんです。

——それを何名くらいで担当されたんでしょう。

保原 約二〇人の集団移転推進課が担当したんですが、半島部の高台移転の造成に関わる技術職の方がほとんどで、移転者の相談にあつていったのは三人くらいだったんですよ。

——それは大変でしたね。

保原 実は防災集団移転事業というのは任意事業なものですから、被災した方が土地の売却を市に申し出た場合は買い上げますよ、という制度なんです。行政側が住んではいけない、家を建ててはいけないと線を引いておきながら、売りたいなら買いましょうというわけです。これはすごく怒られましたね。地権者としては、住んではいけないことにするので土地を売ってくださいと行政が頭を下げるのがスジだと感じるじゃないですか。実際に、

どが田んぼだった土地です。ですから個人の所有地だったんですね。新蛇田地区だけでも、地権者は二〇〇人くらいでした。まず、用地買収の担当者が、地権者の方々との交渉を進めて用地を確保していくというのが最初ですね。そこに戸建ての宅地分が七三〇戸くらい、復興公営住宅の戸数が五三〇戸で、合わせて二二六〇世帯くらい、想定人口とすれば二五〇〇〇〜三〇〇〇人ほどが住むまちを計画しました。

——大きなまちですよな。移転される方がどこに入るかといったことはどのように決めたんでしょう。

保原 もともと被災している地域内の宅地情報などから、だいたい何坪くらいをお持ちの方がいるかをまず統計的に把握しまして、あとは今回どれくらいのお大きさを希望しますかというアンケートをとつて、それで一応の区割りをしました。ただ、被災してすぐの頃は石巻で再建すると言つていた方でも、一年、二年と経つ

てしまうと、違う土地が見つかったからとかで意向が変わってくる方もいますから、当初の申込の数を下回ったこともありまして、みなさんほぼ希望の地区に住んでいたことができています。

——まちづくりで重要視した点は何でしょうか。

保原 復興公営住宅に入られる方は、高齢、単身の世帯が多いです。ですから新市街地では公園が非常に重要であると位置づけて整備をしてきました。復興住宅でも、仮設でもそうでしたが、やはり一人ぐらしの方は家にこもりがちになりますので、そうした方が外に出て来やすい仕組み、仕掛けを作ろうということで、遊具の近くにたとえば東屋やベンチを設置して、お年寄りと子どもが近くにいられるようにとか、新蛇田地区内の公園四カ所を、それぞれ四季をテーマに別々の種類の木を植えて、季節ごとに別の公園を楽しんでいただけるような仕組みも取り入れたりしています。

れている方々が主体になったまちづくりが少しでも早くはじめられたらという思いがありました。さらに言えば、移転が決まったも宅地の引き渡しはまだ先という、今は仮住まいをしている方々が、早くこのまちに住みたいと思っていただけのようにもしたかったです。

——かなり大々的にやられたようですね。

保原 はい。ちよつとやり過ぎたかもしれません（笑）。当日は朝の10時から、市長の式辞、来賓祝辞などのあと、記念植樹をしてという式典に続き、住民むけのステージイベントとして、蛇田中学校の生徒による吹奏楽や、地元高校生のチャ・リーディング、石巻を支援いただいたゴスペル・アーティストのジョン・ルーカスさん、気仙沼出身のシンガーソングライター熊谷美美さんのステージなど盛りだくさんの内容でした。それを夕方五時までやりまして、最後には、打ち上げ花火をあげたんです。

——花火もあげたんですか（笑）。

半島部の集団移転では、高台に造成して、もともと住んでいた方だけが残るので、コミュニティは比較的維持しやすい状況にはあります。でも新市街地については、市内のさまざまなところで被災した方々が集まってきますので、顔の分る方ばかりではない状況にならざるを得ません。少しでも早くコミュニティの形成をはかるためには、行政の担当がそれを意識していく必要があります。そんなことも念頭に置きながら造成工事をしてきました。

ひとつの区切りとしての「まちびらき」

——そして「まちびらき」になったわけですね。一月という時期にはなにかあるんですか？

保原 二〇一二年一月に、田んぼの土地を全部買い終わって、新蛇田の起工式がありました。それから二年後の二〇一四年の一月には、はじめて宅地の引き渡しがあったんですよ。ですから私のな

保原 はい。花火大会って、真っ暗になつてからやるじゃないですか。でも一月の五時というのはなかなか微妙な時間で、明るすぎると煙しか見えないなんてことになってしまうので、けっこうドキドキしました。でも結果的には、マジックアワーと呼ばれる日没後の十数分の幻想的な時間帯での花火になりました、ほんとにみなさんに喜んでいただけたと感じております。また、石巻川開き祭りという夏に恒例のイベントがありまして、震災前は川に架かる橋を使ったナイヤガラ（ナイヤガラ）の仕掛け花火がありましたが、震災以降中止されていたんです。それが、今回大型クレーン二台を使ってナイヤガラを復活させちゃいました。懐かしく思い出された方も多かったようで、とても好評でした。

ただ警察と消防にはご指導を受けましたけど（笑）。恒例の花火大会なら一カ月前くらいに手続きをするだけでもいいらしいんですが、今回のような新規のも



地元高校のプラスバンドの演奏などのステージイベントも

かでは一月が新蛇田の誕生月と思っておりました、そんな個人的な思いが最初なんですけれども。

最初に「まちびらき」を前倒ししたと申し上げましたけれども、タイミング的な問題とは別に、すでにお住まいになら

のを一カ月を切つてから申請することになつてしまつて、たつぷり指導されてしまいました。でも、家が建つてしまつてもうこの場で花火をあげることなどはできなくなつてしまうので、まさに最初で最後の花火だったんですよ。



新しいまちが現れつつある会場

新しいまちの自治を サポートしていきたい

——大きな区切りになったわけですね。
今後の石巻についてはいかがですか。
保原 二〇一六年の三月に新蛇田地区の



マジックアワーに映える打ち上げ花火

南側に造成している新蛇田南地区にJR
仙石線の「石巻あゆみ野」という新しい駅
もできることになりました。被災された
方々は、住宅を再建されてからが本当の
復興にむけたスタートだと思えます。区
画整理事業の名称で、新蛇田地区や新蛇
田南地区と呼んでいた地区も先日、公募
のなかから案を絞りまして、実際に住む
みなさんの意見もうかがって、これから
は「のぞみ野」と「あゆみ野」といった
まちの名前になります。

移転される方々が「理想のまちを望み、
未来へ向かって歩みます」という思いが
込められている町名だと思っています。

その街で、どのようにコミュニティの
形成と一体感の醸成を行政として支援で
きるかが課題になってくると思います。
地域協働課が担当課となって関わって
いくこととなりますが、これまで携わっ
てきた私としては、これまで知り合っ
てきた方々と、担当課の架け橋となる役割を
果たし、市が造成した街という畑に、住

んでいる人たちが種をまき根がはり、自
分たちの街を育て、笑顔という花が咲く
ことが、本当の自治ではないかと私は感
じております。震災から五年目の今年が、
その大きなスタートの年になればと思っ
ていますので、しっかりとサポートする
体制につなげていきたいですね。

最後に、この場をお借りして、これま
でご支援をいただきました皆様に、本当
にありがとうございます。と御礼を述べ
させていただきます。

二〇一五年二月一九日 於：石巻市役
所